

『コロンブスの卵』各国版

福島 直 (名誉教授, 地球物理学)

6年前の東京大学理学部広報18巻2号(昭和61年9月発行)に、“コロンブスの卵”という便利な慣用句が英語を母国語とする人達には全く通じないという事実を報告しました。その後私は、コロンブスの米大陸発見500年目にあたる本年までに「他の言語(おもに欧州の主要言語)ではこの句が諺として通用しているかどうか」をできるだけ調査しようと努力してみました。

“コロンブスの卵”という諺の由来が含まれている物語は、実話ではなく、コロンブスにまつわる逸話として後日創作されたもので、日本では大正10年以来戦前の小学校4年生国語教科書に取り入れられていたが、戦時中の国民学校や戦後の小学校の教科書には収録されていない。わが国の義務教育課程で使用されている教科書から“コロンブスの卵”の教材が消えてから既に半世紀も経っているので、いずれはこの諺も日本でも通じなくなるであろうと私は予想していたところ、現在既に大学生の何割かは、“コロンブスの卵”という諺をもはや知らないような時代に入っているようです(但し本学で調査を行ったわけではありません、念のため)。後世の歴史家たちに「コロンブスは15世紀末に大西洋横断航海に成功したが、黄金の国ジパングを発見したいという彼自身の望みはかなえられなかった。しかしその後20世紀に入り“コロンブスの卵”が日本に到着したが、その寿命は僅か百年足らずに過ぎなかった」と指摘される事態になりかねないであろう。

“コロンブスの卵”という諺は、ヨーロッパでは英国・ポーランド・バルト諸国とトルコ領地区を除けば、ギリシャ・ブルガリア・ルーマニア・フィンランド・ロシアにいたるまで、西欧・東欧で広く各国の公用語で通用しています。また大航海時代以来欧州諸国(英国以外)の植民地であっ

た地域でも現地語でかなり通用しています。次頁に“コロンブスの卵”各国版を示します。

“コロンブスの卵”という句が国によってはある種の男性用隠語としても使われていることに注意する必要があります。1987年11月に南米ペルーのアンデス高原にあるHuancayo地磁気観測所の創立65周年記念公開講演を同市の公会堂で通訳付で行った時、“コロンブスの卵”とスペイン語で書いてあるスライドが現われるや否や、会場が爆笑の渦にまきこまれて私はしばし演壇上で立往生しました。アルゼンチンの研究所や大学で私の学術講演に同じスライドを用いたときには、聴衆の顔がほころんで小さな笑い声も聞こえましたが、ペルーでこんなことが起ころうとは夢想だにしていませんでした。アルゼンチン国内で講演を始める前に、“コロンブスの卵”のスペイン語でのスペリングを確かめるべく質問した相手が偶然にもProfesoraやDoctoraだけでしたので、『講演にはそんな言葉を使わない方が無難ですよ』と予め忠告してもらえなかったことがペルーHuancayoでの珍事件を招いた原因でした。

数年前のある日、米国科学アカデミー会員H.F.博士が私に『コロンブスの米大陸発見から500年目にあたる1992年を国際宇宙年と名付けて適当な記念行事を実施しようとの案が米国で考えられはじめています』と話してくれました。そこで私は『もし米国が“コロンブスの米大陸発見500年を記念する事業に関するアイデア”を公募するならばこの機会に他の多くの文明諸国でひろく通用している“コロンブスの卵”という諺を、おそまきながら英語にも取り入れるようにして欲しい』と私見を述べました。この提案の根底には「国際コミュニケーションの場で圧倒的な言語上の有利さを満喫している英語国民は、言語上不利

な立場に置かされている他国民に少しは同情を示すべきである」という私の偽らざる気持ちが潜んでいます。日頃私同様に言語上の不利・不満をこぼしていた国々の同業科学者達は私の提案に大賛成で、“コロンブスの卵”各国版蒐集にも手を貸してくれました。その人達の期待に応えるべく、また彼らへの謝意もこめて、私の調査成果をもとに、“コロンブスの卵—全世界の科学者に愛用されていても英語国民には全く通じない諺—”と題するエッセイを書き、それを英国や米国で発行されている著名科学誌に投稿してみましたところ、いずれも「興味深い記事ですが自社誌で取り扱う題材ではありませんので、他誌で採択してくれることを期待しています」と婉曲に掲載を拒否されました。このように対処される可能性は十分あり得ると予め覚悟していた一方、非英語国民からの一理ある批判を受理してくれる度量を示すかも知れないと期待をかけていましたのに、残念な結果に終わりました。米国地球物理学会が会報に私の稿を掲載する可能性を検討してくれましたが、それも実現するには至りませんでした。

私の英文稿を校閲して下さった地球惑星物理学教室のロバート・ゲラー先生は、『私も日本に来るまで“コロンブスの卵”という諺を知りませんでした。それと似た意味を持つ語句として英語には“cutting the Gordian knot”という表現があります』と教えてくれました。

ギリシャの故事に由来するこの諺はドイツ語でも用いられています [den gordischen Knoten durchhauen (zerhauen)] ので、ヨーロッパ諸国ではきっと各国語でひろく通用していることでしょう。ところでこの二つの諺は“難問を意外な方法で解決する”という意味では同じですが、解決手段に“機知”と“武力”の違いがあります。科学的難問を簡明直截な新アイデアに基いて電子計算機を駆使して解決する場合には、どちらの方が適切な表現なのでしょうか。

Table I. “COLUMBUS’ EGG” idioms in various languages (as of May 1992)

コロンブスの卵	(Japanese)
코럼부스의달걀	(Korean)
Telur Colombus	(Indonesian)
Nen ou Colomb	(Wolof in Senegal)
Colonpa runtun	(Quechua in Peru)
Die eier van Columbus, or Columbus se eier	(Africaans)
Het ei van Columbus	(Dutch, Flemish)
Das Ei des Kolumbus	(German)
O ovo de Colombo	(Portuguese)
El huevo de Colón	(Spanish)
L’ou de Colom	(Catalan)
L’uovo di Colombo	(Italian)
L’oeuf de Christophe Colomb	(French)
L’ov da Columbus	(Romanian)
Oul lui Columb	(Romanian)
Kólumbusareggið	(Icelandic)
Kolumbus æg	(Danish)
Columbi egg	(Norwegian)
Columbi ägg	(Swedish)
Kolumbuksen muna	(Finnish)
Kolumbusz tojása	(Hungarian)
Veza e Kolombit	(Albanian)
Kolumbovo vejce	(Czech)
Kolumbovo vajce, or Kolumbusovo vajce	(Slovak)
Colombovo jajce	(Slovenian)
Colombovo jaje	(Croatian)
Kolumbovo jaje, or Колумбово јaje	(Serbian)
Колумбово јajце	(Macedonian)
Колумбово яйцо	(Russian)
Колумбово (or Колумбовото) яйце or Яйцето на Колумб	(Bulgarian)
Το αυγό του Κολόμβου	(Greek)

A direct translation of “Columbus’ egg” is not used as a colloquial idiom in Gaelic, Polish, Turkish, Arabic, Persian, Tagalog and Chinese (哥倫布的雞蛋). It is interesting to note that another Hungarian word for “egg” is spelled “mony” (which shows some similarity to Finnish), and this word is used in Transylvania (northern part of Romania and Hungary) now to mean just a testicle. In Italian, “colombo” also means “pigeon”, and in its plural form means “a pair of lovers”.